コルベール文書「ヴェルサイユ宮殿：概論」の ヴェルサイユ新城館造営過程への位置づけ

UPON "PALAIS DE VERSAILLES : RAISON GENERALE" WRITTEN BY COLBERT
ON THE CHRONOLOGY OF CONSTRUCTION OF THE CHATEAU-NEUF OF VERSAILLES

中 島 智 章^{*1}

Tomoaki NAKASHIMA

In this paper, at first, after showing the Japanese translation by the author of the "Palais de Versailles: Raisons générales" written by Colbert, the issues of the former studies on this document are summarized and the author's answer to these points are presented. Based on the key derived from them, i.e. the dimensional data in "Raisons générales", I adequately place this document in the construction history of the *château-neuf* of Versailles. It also shows the reason why the dimensional data indicated in the documents by Colbert should be used rather than the measured value of the *château-neuf*.

Keywords: *Absolutism, France, Le Vau, Louis XIV, Measurement, Perrault*

絶対王政, フランス, ル・ヴォー, ルイ14世, 寸法, ペロー

1. 背景・目的・方法—ヴェルサイユ新城館沿革とコルベール文書

ルイ13世(Louis XIII, 1601–43)の狩猟館だったヴェルサイユ城館が大宮殿への第一歩を記したのは、1668年から1670年にかけて新城館(château neuf)が建設されたときである。「包囲建築」(enveloppe)と呼ばれる新城館の沿革については¹⁾、1940年代から様々な論が戦わされてきたが、多くの解釈が存在しえた最大の理由は、本問題に関わる史料、とりわけ、王の建設総監(surintendant des bâtiments du roi)ジャン・バティスト・コルベール(Jean-Baptiste COLBERT, 1619–83)が残した3文書のうちの1通に、それが書かれた年も日付も記されていないことに帰されるだろう。

新城館建設に関するコルベール文書には次のようなものがある。

- ・「ヴェルサイユ宮殿：概論」(Palais de Versailles: Raisons générales)²⁾ 以下、「概論」と略す。
- ・「ヴェルサイユの建築物において陛下が望まれていることについての覚書」(Mémoire de ce que le Roi desire dans son Bâtiment de Versailles)³⁾ 以下、「覚書」と略す。
- ・「ヴェルサイユのために様々な建築家たちが提出した計画案についての講評」(Observations sur les plans présentés par différents architectes pour Versailles)⁴⁾ 以下、「講評」と略す。

以前、筆者は新城館の沿革をめぐる先行諸研究を評価し、関連史料の解釈の違いの問題を浮彫にした⁵⁾。その成果として、問題の焦点となっている史料は「概論」であることを明らかにした。次の段階として、「概論」を新城館の建設史の中に矛盾なく位置付ける作業が必要である。先行諸研究では「概論」→「覚書」→「講評」か

「覚書」→「講評」→「概論」とする説に分かれており、筆者は後者を支持する。そして、「概論」が、1669年6月末以降に採用されたと思われる、王の首席建築家ルイ・ル・ヴォー(Louis LE VAU, premier architecte du roi, 1612–70)のコンペ案改訂案を廃して最終的に実施された案を採用すべきであることをコルベールが主張した文書であるという仮説を提示する⁶⁾。この仮説は先行研究でも提示されているが⁷⁾、論拠は明確に示されていない。本稿の目的は仮説の検証の他、その証明の実施であり、これが本稿の独自点である。

準備作業として、筆者既報で先行諸研究における「概論」の位置付けを評価し、「概論」解釈の上での問題点を整理して、それらの問題点に沿いつつ、先行諸研究の「概論」の位置付けと矛盾点を浮き彫りにする作業は実施した⁸⁾。そこで本稿は、筆者による「概論」邦訳⁹⁾、上記既報の作業概要に詳細を加えた論点のまとめ、各論点に対する先行諸研究と筆者の回答・批評、それらから導き出された鍵となる数値を用いた「概論」の新城館建設史への位置付けの順で論考を進める。筆者は「概論」後半冒頭の記述「前庭内側立面は60ピエの高さになり、前庭は34トワーズの奥行に対して28トワーズの幅しか持たないだろう」が論証の鍵だと考えている¹⁰⁾。この記述は「覚書」にもみられ¹¹⁾、コルベールがとくに認識していた寸法であることがうかがえる。本稿では、彼が「覚書」と「概論」で記した前庭の奥行き寸法と「覚書」でその記述の直後に示した王のアパルトマン(appartement du roi)諸室の東西方向の長さを比較することで上記仮説を証明する。その際、実測値ではなく「覚書」で示された寸法データを用いなければならない理由も示す。

^{*1} 工学院大学建築学部建築デザイン学科 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architectural Design, School of Architecture, Kogakuin University, Dr.Eng.

2. 筆者による「概論」全文邦訳(下線は筆者による)

為すべきこととして計画された全てが、決してよくはならないつぎはぎ細工に過ぎない。

あらゆる美しい邸宅は高く聳えていなければならない、最も高く聳えているものが常に最善である。

ヴェルサイユの邸宅は、奥の池からは円形闘技場形の花壇によってほとんど隠されている。そういうわけでさらなる嵩上げが必要だろう。

新しい建築物の基礎のせいで、前庭と内庭の立面が与える美は失われるに違いない。

何をするにしても、開口部とアーケードはまだ小さいままで、9から10ピエあるべきであるところ、広くても6ピエ1/2の幅しか持ちえないだろう。

前庭内側立面は60ピエの高さになり、前庭は34トワーズの奥行に対して28トワーズの幅しか持たないだろう。

これらの値の間には、いかなる釣合も取れない。

奥行より幅の勝ったこの邸宅の全体にわたって、たった一つの前庭しか取れない。

5または5トワーズ1/2の幅に対して長さ6、7、8または10トワーズの部屋群の規模は、前庭や建築物全体の小ささと如何なる釣合も取れないだろう。

現在か将来、建築のよき趣味を持つ者は皆、この城館が大きな腕と大振りな顔を持つ小男、すなわち、建築物の化物に似ていると思うことだろう。

これらの理由から、取り壊して大邸宅を建設するという結論が導かれるかもしれない。

2箇所の花壇の園路の間に幅52トワーズ、正面の大花壇の園路と半月形平面の入口の間に90トワーズの奥行しか取れない。

この空間に大邸宅を作ることは不可能である。

敷地は花壇によってだけでなく、さらに村、教会堂、沼によっても狭められている。花壇や通路の大きな傾斜は、全てをひっくり返して途方もない出費をすることなしに、これ以上、敷地を広げたり費やしたりすることを不可能にしている。

南の花壇が城館と同じ高さにあるのは確かだが、反対側のものは大きな傾斜を持っていて、加えて、城館には一つに統合された同一平面上の花壇かテラスを備えなければならないのだが、これは不可能である。

さらなる敷地を得るためには、全てをひっくり返し途方もない出費をせねばならないゆえ、陛下はこの場所が自然に提供できる以上の敷地を占めたいとお望みになられているとは思われない。そのような出費はルーヴルや他の大事業のために為し、陛下がこの邸宅で楽しまれる遊興から長い間身を背けることこそ、陛下にはさらにふさわしく栄光に輝けるものとなるだろう。

それゆえ、陛下がこの解決法をお取りになられるとは考えられない。

次に新しく建てられた部分を全て取り壊すか残すかを検討しなければなるまい。

全てを取り壊すと、決断のなさ、絶え間ない改変と巨額の出費が陛下の全ての偉大なる御業と釣合わなくなるのは確実である。加えて、大邸宅を建造できないのだから、建設されるものは陛下の御政

道の全てと如何なる釣合も取れないだろう。

建てられたものを残す場合は、前述したような不都合に陥るだろう。

ここで、昨年採った解決法に従い、小城館を残し¹²⁾、着工された案に従って包囲建築を建設するという第三の選択肢があるかもしれない。

この選択肢は、陛下がその御代に御自らの偉大さ、すなわち、並はずれてはいるがよく構成された並はずれ方と釣合わないことは何ものでもないという理に適った考えを満足させるものである。

皆のものは、陛下はこの小さな別荘をお持ちになっていたのであり、そこに御自らの住処と宮廷のために建築物を加えられただけであることを理解するだろう。一言でいえば、この建築物は陛下ただお一人の事業だとはみなされないだろう。しかし、小城館の部屋を大城館の部屋とくっつけようとしたり一誤りなしには不可能である一、前庭内側の小城館の壁体に、円柱と大理石で装飾され、小屋組を隠すために嵩上げされたもう一方の壁体をくっつける、あるいは、それで覆ったりしないようよく注意せねばならないだろう。その場合、この小城館は大きな壁体と大きな主棟の間に閉じこめられてしまうからであり、これは他のどのことにもまして非難されるべきことである。

この解決法に反するかもしれないのは、陛下が小城館を取り壊す旨で行った偉大にして公にもされた宣言である。これは違えることのできない約束となっている。

それゆえ、作られた部分を保存しつつ高価なこと何もしない、あるいはその部分を取り壊して小さなこと以外は何もしないという選択肢を取るより他はない。いずれにせよ、陛下について残される永遠の記憶は、この建築物のせいで惨憺たるものとなるだろう。

陛下の御楽しみが充足されたときに、この建築物が倒れることを願うばかりである。

陛下の解決法を取ることを。

3. 「概論」解釈の上での問題点

「概論」は、書かれた時点における新城館の設計を批判した前半部分(上記邦訳の23行目まで)とその解決案を模索する後半部分からなる。それを解釈する上で、注意しなければならない点としては以下の4点が挙げられる。

1) 「概論」には日付が記されていない。この史料の執筆時期を明らかにして3文書の順番を定めなければならない。「覚書」にも日付はないが、この史料は新城館の設計競技の条件を列挙したものであり、この設計競技の進捗状況について報告した、シャルル・ペロー(Charles PERRAULT, 1628-1703)がコルベールに宛てた手紙の日付が1669年6月25日であることから¹³⁾、同年6月のものだということが確実である。「講評」については、史料自体に1669年と記されており、また、これが前述の設計競技の講評である点からも、同年6月下旬以降であることは確実だろう¹⁴⁾。

2) 前半部分で批評対象とされて描写されている現状案を、どの時点での案と認めるのか。とりわけ、具体的な寸法データが提示されている部分を、その案のどの部分の寸法なのかを矛盾なく示さなければならない。「前庭内側立面は60ピエの高さになり、前庭は34トワーズの奥行に対して28トワーズの幅しか持たないだろう」と

いう部分の解釈はとくに重要である。

3) 後半部分で示された問題解決のための各選択肢が、具体的に何を意味しているのか明らかにする必要がある。コルベールは三つの選択肢があると述べているが、実際に示されているのは次の四つである。AとCは誤解の余地はないが、Bでいう「新しく建てられた部分」とは何を指すのかを明らかにしなければならない。

A すべての「取り壊して」敷地をもっと広く整備した上で「大邸宅を建設する」。

B 「新しく建てられた部分を全て取り壊すか残すかを検討」する。すなわち、この選択肢は下記のように実質二つである。

B-1 「新しく建てられた部分を全て取り壊す」。

この記述だけでは「新しく建てられた部分」が具体的に何を指すのか明らかではない。1668年10月以降に建設された部分全てだろうか。あるいはある時点以降に建てられた部分だけを指すのだろうか。いずれにせよ、その上で、新設計の新城館を建設することになるが、選択肢Aの検討で明らかになったように「大邸宅を建造できないのだから、建設されるものは陛下の御政道の全てと如何なる釣合も取れない」ことになる。

B-2 「新しく建てられた部分を」「残す」。

「概論」が批判している案に留まることを示していると判断できる。これは「前述したような不都合に陥る」との記述から明らかである。それゆえ、コルベールの頭の中では、選択肢B-2は三つの選択肢の中には入っておらず、実質上、選択肢Bは選択肢B-1のみである。

C 「小城館を残し、着工された案に従って包囲建築を建設する」。

4) 「概論」以前に行われたという「陛下が小城館を取り壊す旨で行った偉大にして公にもされた宣言」の時期を新城館建設史の中に明確に位置付けるか、または蓋然性高く推定しなければならない。

4. 先行諸研究と本研究における「概論」の位置付け

上述の4点について、先行諸研究、すなわち、キンブル¹⁵⁾、マリー¹⁶⁾、ウォルトン¹⁷⁾、バージャー¹⁸⁾、ル・ギュー¹⁹⁾の研究において、「概論」がどのように位置付けられているのかを以下にまとめ、その上で各説を批評する。その後、筆者の説を述べる。

キンブル説(1949)

- 1) 1669年5月 概論→覚書→講評
- 2) 小城館を残さない「包囲建築」のみの案
- 3) B-1 新城館を壊して小城館だけの状態に戻す
B-2 新城館を残して小城館を予定通り壊す
- 4) 1668年10月の着工前

マリー説(1953, 1968)

- 1) 1665年8月18日 覚書→講評→概論
- 2) National museum Stockholm, Collection Tessin, n° 2392²⁰⁾ 以下、「n° 2392」と略す(Fig.1)。
- 3) B-1 n° 2392に基づいて建設された部分だけを壊し小城館だけの状態に戻す
B-2 n° 2392に従う
- 4) 1664年

ウォルトン説(1977)

- 1) 1669年6月以降 覚書→講評→概論
- 2) n° 2392
- 3) B-1 n° 2392に基づいて建設された部分だけを壊し小城館だけの状態に戻す
B-2 n° 2392に従う
- 4) 言及なし

バージャー説 その1(1980)

- 1) 1668年末～1669年初頭（おそらくは後者）概論→覚書→講評
- 2) 小城館+「包囲建築」という案
→「34トワーズの奥行に対して28トワーズの幅しか持たない」前庭を、小城館の前面両側に1660年代初頭に建てられた付属棟の間の空間「王の前庭」(cour royale)だと解釈
- 3) B-1 新城館を壊して小城館だけの状態に戻す
B-2 新城館を残して小城館も予定通り残す→B-2=C
- 4) 1668年10月の着工前？

ル・ギュー説(1983)

- 1) 1669年6月 概論→覚書→講評
- 2) 直接の言及はないが、小城館+「包囲建築」
- 3) 直接の言及はないが、バージャー説その1と同様
- 4) はっきりせず(着工前？、1669年6月？)

バージャー説 その2(1985)

- 1) 1669年夏～秋 覚書→講評→概論
- 2) n° 2392
- 3) B-1 1668年10月以降に建設された部分は全て取り壊して小城館だけの状態に戻す
B-2 n° 2392に従う
- 4) 1669年6月

キンブル説の欠点は2)にある。「概論」前半部分で批評対象とされて描写されている現状案を、小城館を残さない「包囲建築」のみの案だとすると、「前庭は34トワーズの奥行に対して28トワーズの幅しか持たないだろう」という記述について、前庭の奥行き

Fig.1 National museum Stockholm, Collection Tessin, n°2392

と幅の寸法が逆になっていると仮定しなければならない。可能性はなきにしもあらずだが、かかる仮定を自説の基礎に据えるには、その仮定に蓋然性を付与するさらなる立論が必要なはずである。

マリー説の欠点は「概論」の書かれた時期を1665年8月18日としている点である。「概論」には書かれた日付がないが、コルベール文書を活字化して公刊したピエール・クレマンが「概論」を、1665年の日付を持つ文書の間に配したことに従ったようだ。クレマンがいかなる根拠で日付のない「概論」をこの位置に配したのかは説明されておらず、クレマンの公刊資料が二次的なものである以上、ここは検証が必要なはずだ。実際、マリー説に従うなら、1665年時点ですでにル・ヴォーのコンペ案を改訂したn° 2392が実現していたことになるが、様々な画像史料により、少なくとも1668年7月18日の「王の大ディヴェルティスマン」(Le grand divertissement royal)の時点では小城館だけの姿であり²¹⁾、新城館は建設されていなかったのは確実だ。

ウォルトン説は、1) についてマリー説を否定しつつも、2) と3) ではマリー説と同様である。後述するように、2) については、「概論」前半部分で批評対象とされて描写されている現状案をn° 2392と仮定するならば、「前庭は34トワーズの奥行に対して28トワーズの幅しか持たないだろう」という記述と矛盾することはない。マリー説、ウォルトン説ではこの点についてとくに検証されてはいない。3) についてはマリー、ウォルトン両者とも「新しく建てられた部分」をn° 2392に基づいて建設された部分と判断している。これは両者がn° 2392を新城館の当初案と考えていることに起因する。だが、そう考えるならば、「昨年採った解決法に従い、小城館を残し、着工された案に従って包囲建築を建設するという第三の選択肢」という「概論」の記述と矛盾する。

バージャーはBERGER (1980.2)とBERGER (1985)で立場を変えている。最初の説では、1) について、着工後の1668年末から工事が中断した1669年6月より前の同年初頭、おそらくは後者とみている。そのように位置付ける理由はとくに示されておらず、新城館の建設過程を順に記述することで蓋然性を示すという手法である。時期は異なるが、1669年6月の工事中断より前だと推定した点ではキンブル説と同様であり、そのため、4) についてはキンブル説と同様である。

2) については、1) の時期を上記のようにみなす以上、小城館を残しつつ包囲建築を建設するという案を指すことになるが、ここでもキンブル案と同様の欠点が立ち現れる。すなわち、「前庭は34トワーズの奥行に対して28トワーズの幅しか持たないだろう」という記述を解釈するにあたって、原文の誤りを想定しなければならないのである。ここでは小城館が囲む前庭ではなく、1661年以降にル・ヴォーが増築した厩舎とサーヴィス棟の間の前庭「王の前庭」のことだと指摘されている。3) についても矛盾がある。選択肢(B-2)を、新城館を残して小城館も予定通り残す案だとすると、選択肢(B-2)は選択肢Cと同じということになってしまう。しかし、前述の通り、選択肢(B-2)とは「概論」前半で批判されている「概論」執筆時の現状案のことであり、その欠点を打開する案として示された選択肢(A)、(B-1)、(C)のいずれとも同じになるはずがない。

ル・ギューの説はこの最初のバージャー説に近い。だが、ル・ギューの関心は、実施案に至る経緯とそれを明らかにするための「覚

書」、「講評」、「概論」の分析というよりも、新城館の着工案の姿を明らかにして復元案を作成することに力点が置かれている。そのため、2) から4) については明確に述べられていない²²⁾。

一方、バージャーの第2の説では、1)の設定ゆえに2) 、3) 、4) も矛盾を抱えることになった最初の説に対し、1) の設定を改めたことで、2) 、3) 、4) の矛盾も改められた。これは本稿での筆者の主張とほぼ同じであり、筆者はバージャーの第2の説を概ね支持する。じつは、2) と3) についてはマリー説、ウォルトン説と同様となるが、2) についてマリーとウォルトンはとくに検証していない。一方、バージャーはル・ヴォーのコンペ案改訂案n° 2392上における前庭寸法の実測値として、幅27トワーズ、奥行き33トワーズという数値を示し、2) がn° 2392であることの蓋然性を確立しようとしている。だが、約2メートルに相当する1トワーズの差を誤差の範囲と判断するか否かは置くとしても、ここで問題とすべきは、図面上の寸法でも実際に建設された新城館の実測寸法でもなく、あくまで建設総監コルベールの頭の中にある寸法だと筆者は考える。本章の最後に上記1) から4) についての筆者の考えを示し、次章でこの寸法の問題を分析する。

筆者の説

- 1) n° 2392が実施された後(1669年7月以降)覚書→講評→概論
- 2) n° 2392
- 3) (B-1) n° 2392に基づいて建設された部分だけを壊し、小城館+包囲建築の状態に戻す
または、1668年10月以降に建設された部分は全て取り壊して小城館だけの状態に戻す
(B-2) n° 2392に従う
- 4) コンペが実施される直前(1669年6月)

1) についてはn° 2392が実施に移された後と推定する。1669年6月25日のペロー書簡によるとその時点ではコンペ案が揃っておらず、n° 2392による計画案の着工はどんなに早くても翌月だろう。一方、n° 2392の実施がほとんど進捗しなかったこと、1670年夏には新城館躯体がほぼ完成していることを考えると、遅くとも1669年秋というバージャーの推定は妥当だろう。2) については次章で検証する。3) については「新しく建てられた部分を全て取り壊す」の「新しく」が1668年10月の新城館着工以降を示すのか、n° 2392着工以降を示すのか、本文だけでは判断できないので、二つの可能性を示した。4) については、実測調査の成果を用いたLE GUILLOU (1976.2)で示されたように、1668年10月の新城館着工時においては小城館の保存が意図されていたことから、1669年6月のコンペ実施直前であると考えるのが妥当だろう。

5. 「概論」の前庭寸法と「覚書」の諸寸法の比較

本稿でコルベールが「覚書」末尾で示した諸寸法を重視するのは、じつはそこに誤りがあるからで、それも含めて執筆者たるコルベールが認識していた寸法が示されているからである。それゆえにこそ、そこに示された寸法は、図面や実際に建設された建築物の実測値よりも意味を持つ。ここでコルベールが「覚書」末尾で示したのは、新城館北棟の王のアパルトマンの諸室の東西方向の長さの寸法だ。

「庭園側正面（の長さ）は35トワーズである。下手の前庭の別棟までは7トワーズある。合計で42トワーズだ²³⁾」と記述した後にその内訳が示されている。それらの数値を下に挙げる。

正面側広間(Le cabinet sur la face)²⁴⁾：5トワーズ1ピエ=31ピエ²⁵⁾
 大寝室(La grande chambre)：5トワーズ2ピエ=32ピエ
 控えの間(L'antichambre)：8トワーズ1ピエ=49ピエ
 饗宴の間(La salle des festins)：11トワーズ4ピエ=70ピエ
 間仕切り壁群の厚さ(L'épaisseur des murs)：2トワーズ=12ピエ
 2枚の外壁の厚さ(Les deux murs de face)：2トワーズ=12ピエ
 合計(Total)：34トワーズ2ピエ=206ピエ
 階段室の余地(Il reste pour l'escalier)：7トワーズ4ピエ=46ピエ
 合計(Total)：42トワーズ=252ピエ

Fig.2 Reconstruction plan of the *appartement du roi* based on the « Mémoire de ce que le Roi desire dans son Bâtiment de Versailles »

この値通りだとすると、控えの間を中心軸上に据えた新城館北棟ファサードが左右対称にならない。LE GUILLOU (1983.12)によると、新城館北棟の東西方向の全長の実測値は計33トワーズ2ピエ、すなわち200ピエという古典主義建築らしいキリの良い数値であり、第1層目の壁体の位置を勘案すると饗宴の間の値に誤りがあると思われる。そこで控えの間の東西の間仕切り壁の厚さをそれぞれ等しいとみて「x」、大寝室西側の間仕切り壁の厚さを「y」、饗宴の間の東西方向の寸法を「z」とすると、 $(200-49)/2=12/2+31+y+32+x$ 、 $(200-49)/2=x+z+12/2$ 、 $12=2x+y$ という連立方程式が立つ。ここから、 $x=5.5$ 、 $y=1$ 、 $z=64$ という解が導かれ、それぞれの寸法は5ピエ6プース、1ピエ、10トワーズ4ピエということが分かる(Fig.2)。つまり、実際の図面上の饗宴の間の寸法はコルベールが認識していた値より

も1トワーズ短かった。

64ピエに対して6ピエ超過しているというこの差は無視できない。注目すべきなのは、以上のように算出した実際の数値ではないと先に主張したのはこのためだ。それよりも、コルベールが新城館北棟の東西方向の長さを概ね35トワーズ、外壁の厚みを1トワーズだとみなしていた点が重要である。n° 2392において「覚書」の時点での新城館北棟ファサードは取り壊されずに再利用されていることから、コルベールが「覚書」で示した数値は使用可能だろう。n° 2392を観察すると、新城館東側ファサードをなす外壁の外側の境界線は新城館北棟西側外壁の内側の境界線とほぼ同一直線上に位置すること(Fig.1)、それゆえ、前庭の奥行き寸法は、新城館北棟の東西方向の全長約35トワーズから新城館北棟の西側外壁の厚み1トワーズを引いた値となることがみてとれる。それゆえ、コルベールの理解では前庭の奥行き寸法は概ね34トワーズとなるのである²⁶⁾。

6. 結論

「概論」はル・ヴォーのコンペ案の改訂案n° 2392を廃して、最終的に実施された案を採用すべきであることをコルベールが主張した文書である。上記の3文書の中で「概論」は最後に執筆され、おそらくは1669年7月から同年秋にかけてだと考えられる。これはすでに先行研究で指摘されていたが、筆者は「覚書」の末尾と「概論」後半冒頭で示された前庭の奥行き寸法34トワーズにコルベールがとくに認識していた寸法として注目し、「覚書」の前庭についての記述の直後に示されたコルベールが認識していた新城館北棟の東西方向の長さの寸法をn° 2392上に当てはめて比較することで、「概論」前半で批判された「概論」執筆時の現状案がn° 2392であることを明らかにし、上記の結論の蓋然性を高めることができた。

謝辞

本稿はJSPS科研費JP19760452、JP23560771、JP15K06402の助成を受けたものであり、ここに謝意を表す。

注

- 1) « enveloppe »の呼称は、建造当時から王の建設總監コルベールが用いていた。CLÉMENT, Pierre: *Lettres, instructions et mémoires de Colbert*, 8 t. en 10 vol., tome 5: *Fortifications. Sciences, lettres, beaux-arts, bâtiments*, Collection des Documents inédits, Imprimerie Impériale, Paris, 1861, pp.266-268, numéro 23を参照。その邦訳としては、LE GUILLOU, Jean-Claude: *Versailles kyu, kareinaru kyuden no rekishi*, translated by IIDA Kishiro, nishimura shoten, 1992 (ル・ギュー, ジャン＝クロード:『ヴェルサイユ宮・華麗なる宮殿の歴史』, 飯田喜四郎訳, 西村書店, 1992)の飯田による「包囲建築」を採る。
- 2) CLÉMENT, pp.266-268, numéro 23. この日付のない文書をクレマン(CLÉMENT)自身は1665年のものとして分類している。なお、本稿における文書名の邦訳は筆者による。
- 3) CLÉMENT, pp.282-284, numéro 38
- 4) CLÉMENT, pp.287-288, numéro 39
- 5) NAKASHIMA, Tomoaki: "On the history of the second campaign of Versailles under Louis XIV - Problems about the dates and the interpretations of the related documents by Jean-Baptiste COLBERT -", *Journal of architecture and planning* No.522, pp.307-311, 1999.8 (in Japanese)
- 6) すでに筆者は、NAKASHIMA: *Versailles kyuden - Taiyo oh Louis XIV to Bourbon ohcho no kenchikuisan*, Tokyo, 2008, second edition, 2019 (in Japanese) (拙著:『ヴェルサイユ宮殿 太陽王ルイ14世とブルボン王朝の建築遺産』, 河出書房新社, 2008, 増補版, 2019), pp.36-38

- で、自説を示したことがあるものの、書籍の性格や紙面の都合等により根拠は記述できなかった。
- 7) BERGER, Robert W.: Versailles: *The Château of Louis XIV*, The Pennsylvania State University Press, University Park and London, 1985, p.16
- 8) NAKASHIMA: “Problems about the dates and the interpretations of Palais de Versailles: Raisons générales”, *Summaries of technical papers of annual meeting F-2 2008*, pp.535–536, 2008.7 (in Japanese)
- 9) 「概論」原文は、フランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France)のデジタル・アーカイヴGallica内の次のリンク先で参照可能(2019年12月10日現在)。なお、本訳文中では、「maison」は「邸宅」、「château」は「城館」、「bâtiment」は「建築物」と訳した。
<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k515536/f371.image>
<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k515536/f372.image>
<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k515536/f373.image>
- 10) « L'élévation du dedans de la cour sera de 60 pieds de hauteur, et la cour n'aura que 28 toises de large sur 34 toises de longueur. »
- 11) « La cour aura 28 toises de large sur 34 toises de long. » 「前庭は幅28トワーズ、奥行き34トワーズである。」
- 12) « le petit chateau » 「小城館」とは、ルイ13世が1631年から1634年にかけて建設した城館のこと。赤煉瓦とクリーム色の切石からなるトゥトンカラーのファサード・デザインは、アンリ4世時代からルイ14世時代初期までのフランス建築の特徴の一つである。
- 13) CLÉMENT, p.284の註1を参照。ペロー書簡全文と邦訳は以下の通り。
 Pour ce qui est des dessins de Versailles, Monseigneur ne peut en avoir aucun aujourd'hui. J'ai esté ou envoyé partout.
 M. Le Vau promet de luy porter ce qu'il a fait, demain, à huit heures du matin.
 M, Le Pauvre m'a mandé qu'il ne pourroit porter le sien avant samedy au matin.
 Gabriel dit qu'il a beaucoup corrigé le sien, qu'il est encore après, et qu'il ne peut l'avoir mis au net qu'à la fin de la semaine.
 Mon frère (Claude Perrault) pourra avoir fait demain ou jedy matin.
 M, Vigarqni est aux champs, et on luy a envoyé mon billet.
 Je n'ay pas trouvé M, Gobert chez luy. A mesure qu'il y aura quelque chose de fait, je l'enverray ou le porteray à Monseigneur avec les remarques que j'auray faites sur les dessins que je verray.
 Comme tous ces Messieurs travaillent nuit et jour, je crois que Monseigneur doit leur donner le temps dont ils ont besoin.
 (Bibl. Imp. *Mélanges Colbert*, vol.153bis, fol.784)
 ヴェルサイユの計画案となるものについて、本日、閣下は何も手にしておられません。そこで私は各所に赴き、あるいは使いを送りました。
 ル・ヴォー氏は、明朝8時に作成したものを閣下に持参すると約束しました。
 ル・ポートル氏は、土曜日朝までは自案を持参できないと私に通知してきました。
 ガブリエルは、自案を大きく修正したところであり、この後もまだ続く、今週末まで清書できないと言いました。
 わが兄は明日か木曜日の朝に完了するでしょう。
 ヴィガラニ氏は農村地帯の方に行っていたので、私の通知文が彼に送付されました。
 ゴベール氏は自宅におらず、会えませんでした。今後、彼が作成したものがあるなら、私が確認しその計画案について注記した上で、閣下に送付するか、あるいは持参します。
 以上の諸氏は終日終夜努めておりますので、閣下におかせられては、彼らに必要な時間をお与え下さいようお願いいたします。
 なお、1669年6月25日は火曜日であり、ル・ヴォーは26日水曜日8時、ル・ポートルは29日土曜日朝、ガブリエルは29日土曜日か30日日曜日以降に清書予定、ペローは26日水曜日か27日木曜日朝、ヴィガラニとゴベールの進捗状況は不明ということになる。「講評」にはル・ポートルとゴベールの案についての講評はないので、両名は提出できなかったものと考えられる。
- 14) 「講評」では4案が批評されているが、前述のペロー書簡によると、設計競技に参加したのは、ルイ・ル・ヴォー、アントワヌ・ル・ポートル(Antoine LE PAUTRE, 1621–79)、ジャック・ガブリエル4世(Jacques IV GABRIEL, 1630–86)、クロード・ペロー(Claude PERRAULT, 1613–88)、カルロ・ヴィガラニ(Carlo VIGARANI, 1637–1713)、トマ・ゴベール(Thomas GOBERT, 1630/40–c.1708)の6名。ル・ポートルとゴベールの案についての記述は「講評」には含まれておらず、1669年6月25日付のペローの書簡の内容から案を出せなかった可能性が高い。
- 15) KIMBALL, Fiske: “The Genesis of the Château neuf at Versailles, 1668-1671, I, The initial projects of Le Vau”, *la Gazette des beaux-arts*, VI^e période tome XXXV, pp.353–372, 1949.5
- 16) MARIE, Alfred: “Le premier château de Versailles construit par Le Vau en 1664-1665”, *Bulletin de la société de l'histoire de l'art français*, Année 1952, pp.50–55, 3^e trimestre 1953
 idem: *La naissance de Versailles, le château - les jardins*, 2 vols., Éditions Vincent, Fréal et Cie, Paris, 1968, pp.55–64
- 17) WALTON, Guy: “《L'enveloppe》 de Versailles: Réflexions nouvelles et dessins inédits”, *Bulletin de la société de l'histoire de l'art français*, Année 1977, pp.127–144, 1977
- 18) BERGER: “The Chronology of the Enveloppe of Versailles”, *architectura, Zeitschrift für Geschichte der Baukunst / Journal of the History of Architecture*, Band 10 / Vol.10, pp.105–133, 1980.2
 idem, 1985, pp.16–21
- 19) LE GUILLOU: “Remarques sur le corps central du château de Versailles à partir du château de Louis XIII”, *la Gazette des beaux-arts*, VI^e période tome LXXXVII, pp.49–60, 1976.2
 idem: “Aperçu sur un projet insolite (1668) pour le château de Versailles”, *la Gazette des beaux-arts*, VI^e période tome XCV, pp.49–58, 1980.2
 idem: “Le château-neuf ou enveloppe de Versailles. Conception et évolution du premier projet”, *la Gazette des beaux-arts*, VI^e période tome CII, pp.193–207, 1983.12
 idem: “Le château neuf ou enveloppe de Versailles. Conception et évolution du projet automne 1668 - été 1670”, *Versalia, Revue de la Société des Amis de Versailles*, Numéro spécial N°8, pp.112–133, 2005
- 20) MARIE, Alfred: *La naissance de Versailles*, 1968, Pl.XXXVI左, pp.56–57間に所載されている。
- 21) 「ディヴェルティスマン」とは「遊興」、「気晴らし」の意。
 IMATANI, Kazunori, INOUE, Satsuki: *France Ongakushi*, Tokyo, 2010 (in Japanese) (今谷和徳, 井上さつき:『フランス音楽史』, 春秋社, 2010), p.150には「ヴェルサイユの大ディヴェルティスマン」とあり、本稿でも邦語に置き換えず「ディヴェルティスマン」の表記を採る。
- 22) LE GUILLOU, 2005
- 23) « La face sur le jardin a 35 toises./ Jusqu'au pavillon de la basse-cour, 7 toises./ En tout, 42 toises. »
- 24) 正面側広間は実施案では閣議の間(cabinet du conseil)となった。
- 25) 1トワーズ(toise)=6ピエ(pied)、1ピエ=12プース(pouce)。ピエは英語のフィート(foot, feet)に相当。これらのメートル法換算値は各国各地方によって異なるが、ここではピエ・ド・ロワ(pied de roi)、「王尺」であり、1トワーズ=約1960.2ミリメートル、1ピエ=約326.7ミリメートル。MARION, Marcel: article « Mesures (et poids) », *Dictionnaire des institutions de la France aux XVII^e et XVIII^e siècles*, Éditions A.et J.Picard, Paris, 1923. Réimpression de l'édition originale de 1923, 1993, pp.373–376、とりわけ、p.374、CABOURDIN, Guy; VIARD, Georges: article « Mesures », *Lexique historique de la France d'Ancien Régime*, Librairie Armand Colin, Paris, 1978, p.213、および、GRUTER, Édouard: article « Poids et mesures », BLUCHE, François (sous la direction de): *Dictionnaire du Grand Siècle*, Librairie Arthème Fayard, Paris, 1990, pp.1213–1214を参照。
- 26) なお、寸法の内訳によると、新城館北棟の東西方向の長さは、実際には33トワーズ2ピエ、コルベールの示した数値でも34トワーズ2ピエとなるので、前庭の奥行きは、それぞれ、32トワーズ2ピエ、33トワーズ2ピエと算出されるが、ここで重要な数値はコルベールの頭の中にあつた概算値の方であることに、ここでも重ねて注意を喚起しておく。

UPON “PALAIS DE VERSAILLES : RAISON GENERALE” WRITTEN BY COLBERT ON THE CHRONOLOGY OF CONSTRUCTION OF THE CHATEAU-NEUF OF VERSAILLES

Tomoaki NAKASHIMA ^{*1}

^{*1} Assoc. Prof., Dept. of Architectural Design, School of Architecture, Kogakuin University, Dr.Eng.

The château de Versailles which had been a hunting lodge of Louis XIII became a huge Palace when the *château-neuf* was built from 1668 to 1670. Regarding the chronology of this *château-neuf* called envelopment, various theories have been fought since the 1940s, but the reason why many interpretations could exist is that “Palais de Versailles: Raisons générales”, one of the three documents related to this problem by Jean-Baptiste Colbert doesn't bear the date on which it was written.

The author previously evaluated former studies on the chronology of *château-neuf* and emphasized the differences in the interpretation of these three documents. As a result of that, it is revealed that the interpretation of “Raisons générales” is the most important. Therefore, as a next step, it is necessary to work “Raisons générales” in the construction history of *château-neuf* without contradiction. In this paper, I argue that “Raisons générales” should explain the adoption of the finally realized plan by abandoning the chief architect's competition plan which is thought to have been adopted since the end of June 1669. In other words, I believe that “Raisons générales” was written last in the above three documents. Although this order has already been presented in previous studies, the reason for doing so is not indicated, so the presentation of that reason is the original purpose of this paper.

As preparatory work, I already assessed the position of “Raisons générales” in former studies in my previous report, indicated difficulties for the interpretation of “Raisons générales” and carried out the work which highlights the positioning and inconsistency point in the interpretation of “Raisons générales” in these studies. In this paper, at first, after showing the Japanese translation by the author of the “Raisons générales”, the points of the above work and issues are summarized and the author's answer to these points are presented. Based on the key derived from them, i.e. the dimensional data in “Raisons générales”, the author adequately places “Raisons générales” in the construction history of the *château-neuf* of Versailles. The author indicates that the dimensions shown in the description that “L'élévation du dedans de la cour sera de 60 pieds de hauteur, et la cour n'aura que 28 toises de large sur 34 toises de longueur” at the beginning of the second part of “Raisons générales” is the key to this argumentation. The author proves the above hypothesis by comparing these dimensional data with the dimensions of the rooms of the *appartement du roi* shown in another document written by Colbert, “Mémoire de ce que le Roi desire dans son Bâtiment de Versailles”. At that time, it also shows the reason why the dimensional data indicated in this “Mémoire” should be used rather than the measured value of the *château-neuf* of Versailles.

(2019年12月13日原稿受理, 2020年6月2日採用決定)